泉鏡花記念館・金沢能楽美術館共同企画「鏡花と能楽」展示報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/28174

c. 鏡花と松本家―初対面の場・松本金太郎宅稽古舞台―

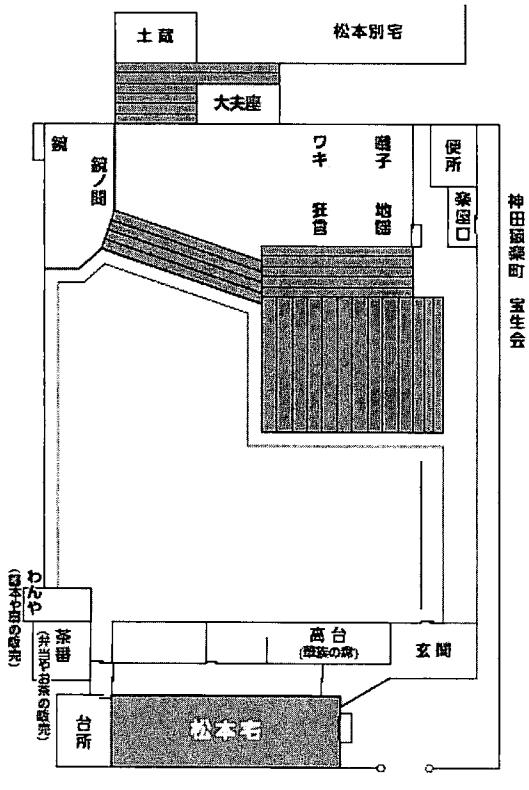
鏡花の伯父・松本金太郎（1843-1914）は、加賀藩お抱え江戸詰葛野流大鼓方中田万三郎の三男・鏡花の母鈴の実兄として生まれ、幼くして宝生流の名門松本彌八郎の養子となり、長じて十六世宗家宝生九郎知栄の片腕として活躍した能楽師である。明治維新の際は徳川慶喜につき従って静岡に移住し、竹細工の内職で糊口を凌ぐなど辛い生活を送ったが、明治 17 年、能楽復興の兆しにより上京し、神田猿楽町に稽古舞台を建てる。ここでの稽古能は維新後の能楽衰退期の最中、宝生流を代表する演能会と認められるようになり、次第に発展拡大して後の宝生会の母体となった。「明治期の能楽界は、宝生九郎抜きに語れず、明治期の宝生流は、松本金太郎抜きに語れない」と言われるように、維新直後の能楽界の危機的状況から、明治期の宝生流隆盛を成し遂げた流儀最大の殊勲者として極めて高く評価されている人物なのである。その高潔な芸風は墨絵の名画のようだと賞される一方で、四角張ったことを嫌い、一部では「ベランメエ金太郎」とも称された洒脱かつ世話好きな人柄から、鏡花をはじめ多くの人々に慕われていた。少年期より酒を愛し、酒にまつわるエピソードには事欠かず、鏡花作品中にも舞台前に豪快に酒を煽る能楽師など金太郎を彷彿とさせる人物が登場する。

この松本家を鏡花（当時 20 歳）が訪れ、金太郎や叔母のきんらと感動的な対面を果たした様子が、明治 25 年 7 月 9 日付父泉清次宛書簡（(財) 石川近代文学館蔵）に生き生きと綴られている。

> （略）おきん様は当地にお出とのこと、飛立つ程嬉しく何処と問へば牛込から遠からぬ「神田猿楽町二丁目十一番地松本金太郎方きん。」宙を飛んで車でかけつけ申し候。伯父様も叔母様も「お鈴さんや豊喜さんに逢ふたやうな」と大喜び中にも叔母さんは手を取ってお泣きなされ候、金太郎様御夫婦ともお息才従兄妹もおられ候、今は東京にて二とさがらぬ宝生流の能役者お宅には立派な舞台なぞ有之候。種々ご馳走になり、自分のウチと思うてアマエに来い、おふせられ候、しかし、東京へ来てなぜ早速来てはくれぬと、其返答に困り候、紅葉先生も松本、か　―　よいおぢさんだ　―　とよく御ぞんじ

手を取って喜びの涙を流してくれた叔母のきんや、「自分のウチと思うてアマエに来い」と言ってくれた伯父松本金太郎ら温かな親類の出現は、見ず知らずの土地で暮らす孤独な鏡花にとって大きな支えとなったであろう。当時（明治 25 年）の松本家は、宝生九郎や旧大聖寺藩主前田利鬯らを中心に稽古能がいよいよ活発に催された頃。翌年の舞台改築と「宝生会」への改名を目前に、宝生流の本拠地としていよいよ活気づいていた。挿図は大正 2

年改築以前の松本家稽古舞台の間取りを再現した見取り図である。明治26年に舞台部分を改築したようだが、大凡の間取りは保たれていたであろう。鏡花と叔母の中田きんが手をとりあって涙ながらに対面を喜んだ場は、門すぐ左の「松本宅」居間と考えられる。



これ以後、鏡花は金太郎と旅行をともにするなど松本家と終生交流を深めた。とりわけ金太郎の次男・長(ながし)(1877-1935)とはゆかりが深く、鏡花は長の婚礼の媒酌人を勤めている。長も父金太郎と同様に十六世宝生九郎より薫陶を受け、その品格ある芸風から野口兼資とともに宝生流の双璧と称された名人である。文豪夏目漱石も長への入門を希望し、一時は次期宝生流宗家に指名されるほどであった(諸事情により最終的には長ではなく金沢出身の宝生嘉内家重英が宗家を継いでいる)。まさに能楽界の鶴と称された長の粋な姿は鏡花の創作意欲を刺激し、『歌行燈』はじめ『通夜物語』『継三味線』など多くの能楽作品にそのイメージが投影された。そして長自身もたびたび「鏡花作品から抜け出てきたよう」と言われていた。

以上のように本展では鏡花の書簡を、関連する当時の能楽資料とあわせて検討することで、その内容がよりリアリティーをもって立ち上がってきた。また作品論については別稿に譲るが、彼の能楽物には松本家を通じて知り得た能楽界のアップデイトな様子が濃密に反映されていると推察される。本展を機会に、今後も能楽と鏡花という異分野が協力・研究することにより新たな世界が開くことを期待したい。

〈松本家平面図参考〉

近藤乾三「猿楽町の舞台のこと」『能　わが生涯』わんや書店　昭和五十五年

(金沢能楽美術館　学芸員　山内麻衣子)